



初代教会における一致の体験

暗唱 聖句

「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」 (使徒言行録 2 : 42、新共同訳)

「そして一同はひたすら、使徒たちの教を守り、信徒の交わりをなし、共にパンをさき、祈をしていた」

(使徒行伝 2 : 42、口語訳)

今週の 聖句

使徒言行録 1 : 12 ~ 14、使徒言行録 2 : 5 ~ 13、黙示録 14 : 12、
使徒言行録 2 : 42 ~ 47、使徒言行録 4 : 32 ~ 37、
使徒言行録 5 : 1 ~ 11、Ⅱコリント 9 : 8 ~ 15

安息日 午後 10/27

今週のテーマ

教会の一致は、真理であられるイエスにおける霊的体験を分かち合うことの結果です——「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」(ヨハ 14 : 6)。交わりの強い絆は、共通の霊的な旅と体験において築かれます。初期のアドベンチストたちは、ミラライト運動*の中でそのような体験をしました。彼らが失望の説明を見いだそうとした1844年の共通の体験は、彼らの心を結びつけました。この体験がセブンスデー・アドベンチスト教会を生み出し、再臨前(調査)審判とそれに伴う真理を発見させたのです。

イエスが昇天されたあとの弟子たちの体験は、非常に異なる背景を持った信者の間に一致と調和を生み出すことにおける、神の言葉、祈り、共通の交わりの力の証拠です。それと同じ体験は、今日でも可能です。

「交わりは集団礼拝において特に重要な要素であると、私は主張したい。……クリスチャンにとって、その人とほかの信者、またその人と主なるイエス・キリストとを結ぶ絆を自覚することに代わるものはない。……イエス・キリストは、まず魂を御自分のところへ連れて来られるが、次に、その魂を御自分の体である教会のほかの信者たちにいつも結びつけられるのである」(ロバート・G・レイバーン『さあ、伏し拝もう』91ページ、英文)。

* 1843年頃にキリストがこの地上に戻ってこられるというウィリアム・ミラーが聖書研究をして得たメッセージに賛同した人たちの再臨運動。

イエスは亡くなられる前に弟子たちと過ごした最後の時間の中で、一人にはしない、と約束されました。慰め主、つまり聖霊が遣わされ、伝道の中で弟子たちに伴われるのです。“霊”は、イエスが話されたこと、なされたことを弟子たちに思いさせ（ヨハ14:26）、さらなる真理を見いだせるように導かれます（同16:13）。昇天の日、イエスはこの約束を繰り返されました。「間もなく聖霊による洗礼を授けられるからである。……あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける」（使徒1:5、8）。聖霊の力は、弟子たちがエルサレム、ユダヤ、サマリアで、また地の果てに至るまで、証人となるように与えられるのです（同1:8）。

使徒言行録1:12～14を読んでください。私たちは、この10日間が集中的な霊的準備期間であったと想像することができます。それは、この弟子たちがイエスの思い出、行動、教え、奇跡を分かち合った修養会のようなものでした。彼らは「心を合わせて熱心に祈っていた」（使徒1:14）のです。

「弟子たちは約束が成就されるのを待っていたあいだ、謙遜な心でほんとうに悔い改め、また自分たちの不信心を告白した。彼らは、キリストがなくなれる前にお語りになったことばを思い出しながら、それらの意味を一層深く理解した。既に記憶から消えてしまっていた真理が再び心によみがえってきて、彼らはこれを互いにくり返し合った。そして、救い主について誤解していたことを思い、自責の念にかられた。主のすばらしいご生涯の場面が行列のように1つ1つ彼らの前を通り過ぎた。主の純粹できよらかなご生涯を冥想しながら、もし、キリストの美しいご品性をあかしめる生活をすることができさえすれば、どんな仕事でもむずかしすぎることはなく、どんな犠牲でも大きすぎることはないと思った。もし、過去の3年間をもう1度やりなおすことができるとすれば、弟子たちはどんなにか違った行動をとることだろう。もし、主に再び会うことができさえすれば、どんなにか熱心に、自分たちが主を深く愛していたかを示そうと懸命に努めることであろう。また、不信の言葉や行動で主を嘆かせたことに、どんなにか真心からのおわびを申しあげることであろう。しかし、彼らは、自分たちはゆるされていると考えたとき慰められた。そして、主に対する信仰をできるかぎり勇敢に世の人々の前で告白し、自分たちの不信心の償いをしようと決心した。……意見の不一致や優位を望む心をすべて捨て、クリスチャンの交わりの中で互いに親密になった」（『希望への光』1369ページ、『患難から栄光へ』上巻30、31ページ）。

◆ 信仰に関してやり直すことができるとしたら、何をやり直したいですか。過去の後悔から、未来をより良くするのに役立つどんなことを学べるでしょうか。

イエスが昇天されたあとの霊的準備の日々は、五旬祭（ペンテコステ）の出来事で頂点を迎えました。使徒言行録2:1は、その日弟子たちは、聖霊が注がれる直前、「一つになって集まってい（た）」と述べています。

旧約聖書において、五旬祭は、すべてのイスラエル人男性が参加を義務づけられていた三大祭りの二番目の祭りでした。それは過越祭から50日後に催されました（ギリシア語の「ペンテコステー」は「50日目」の意味）。この祭りの間に、ユダヤ人は夏の収穫の初穂を感謝の献げ物として神にささげました。

イエスの時代までに、五旬祭はシナイ山での律法授与（出19:1）の祝いも兼ねていたようです。それゆえ、私たちはそこに、イエスに関するキリスト教メッセージの要としての神の律法の継続的な重要性を見ます。そして、そのイエスの死が、神の律法を破ったことに対する赦しを、悔い改めるすべての人にもたらすのです。終わりの時代に関する極めて重要な聖句の一つが律法と福音の両方を取り上げていることは、不思議ではありません——「ここに、神の掟を守り、イエスに対する信仰を守り続ける聖なる者たちの忍耐が必要である」（黙14:12）。

また、モーセが十戒を受け取ったときのシナイ山と同様（出19:16～25、ヘブ12:18）、多くの異常な現象がこの五旬祭でも起きました。「突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、「霊」が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話したした」（使徒2:2～4）。

問1 使徒言行録2:5～13を読んでください。この驚くべき出来事には、どのような意味がありますか。

五旬祭は、喜びにあふれた祭り、主の恵みを感謝する祭りとなるべきものでした。「酔っている」という根も葉もない非難が生じた理由は、恐らくそこにあったのでしょう（使徒2:13～15）。神の力は、さまざまな言葉で話したり、聞いたりする奇跡の中に特に見られます。この祭りのために、ローマ帝国中からエルサレムに来たユダヤ人は、彼らの母語でメシアなるイエスのメッセージを聞きました。

五旬祭は独特な方法で、バベルの塔で本格的に始まった人類家族の離散と民族の形成を打ち消す手助けをします。恵みによる奇跡が、人類家族を再統合し始めます。世界規模での神の教会の一致は、バベルで失われたものの回復という神の国の性質を証明するのです。

ペトロの説教と、悔い改めと救いを求める訴えに応答して、およそ3000人が、メシアとして、またイスラエルに対する旧約聖書の成就としてイエスを受け入れる決心をしました。それらの人の心に、神が働いておられました。多くの人が、遠くの場所でイエスについてすでに聞き及んでおり、会いたいという希望を抱いてエルサレムへ来ていたのかもしれませんが。中には、イエスに会ったことがあり、神の救いに関する彼のメッセージを聞いたものの、弟子になる誓いを立てられなかった人もいたかもしれません。五旬祭において、神は奇跡的に弟子たちの生活に介入し、イエスの復活の証人として用いられました。今や彼らは、人々がイエスの御名において罪の赦しを得られることを知っています（使徒2:38）。

使徒言行録2:42～47を読んでください。この新しい信者の共同体が最初に携わった活動が使徒の教えを学ぶことであったというのは、注目に値します。聖書の教えは、新しい信者たちに霊的成長を促すための重要な方法なのです。イエスは御自分の弟子たちに、「あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」（マタ28:20）と命じておられました。この新しい共同体は、イエスに関するあらゆることを弟子たちから学ぶために時間を用いました。彼らはイエスの生涯や働きについて、また彼の教え、たとえ話、説教について、さらには奇跡について、たぶん聞いたことでしょう。それらはすべて、旧約聖書の預言者の書の成就として説明されました。

彼らは祈りとパンを裂くためにも時間を費やしました。パンを裂くことが聖餐式を指しているのか、使徒言行録2:46がほのめかしているように、単に会食を指すのかは、はっきりしません。交わりへの言及は、この新しい共同体がしばしば、しかも定期的に、彼らの礼拝の中心地としての役割を依然果たしていたエルサレムの神殿や、彼らの自宅で、ともに時間を過ごしていたことを確かに意味しています。彼らは親しい生活を共有していたのです。彼らはともに食事をし、祈りました。祈りは信仰の共同体の極めて重要な部分であり、霊的成長に欠かせません。この新しい共同体は、礼拝のために時間を用いました。これらの活動は、「熱心に」行われていたといえます。

この揺るぎない交わりは、エルサレムのほかの人たちとの良い人間関係を生みました。新しい信者は「民衆全体から好意を寄せられた」（使徒2:47）と記されています。間違いなく、彼らの生活の中における聖霊の働きが、周囲の人々に強い感銘を与え、メシアなるイエスの真理の強力な証拠となったのです。

◆ あなたの教会は、一致、交わり、あかしに関して、ここに示されている模範から何を学ぶことができますか。

ルカは、五旬祭の直後、イエスの弟子たちが体験した交わりの中から自然に生じたことの 하나가相互支援であった、と記しています。「信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った」（使徒2:44、45）。

この日用品の分かち合いは、共同体の要求ではなく、彼らが体験する交わりの中での相互愛の中から自発的に派生したものです。それはまた、彼らの一致の具体的なあらわれでした。このような相互支援はしばらく続き、使徒言行録4章と5章に詳細が記されています。それはまた、私たちが次に見るように、新約聖書のほかの箇所に見いだされる一つの主題でした。

バルナバが初めて登場するのは、このような文脈においてです。彼は土地を持つ資産家だったようです。彼は共同体のために自分の地所を売り払い、そのお金を使徒たちのもとへ持って来ました（使徒4:36、37）。バルナバは見習うべき模範として描かれています。

使徒4:32～37、5:1～11を読んでください。聖霊に対してあからさまにうそをついたことに加え、この2人は貪欲かつ強欲であることをあらわしました。身勝手さと貪欲以上に、交わりと兄弟愛を素早く破壊できる罪はないかもしれません。もしバルナバが初代教会の交わりの精神の良き手本であるなら、アナニアとサフィラは悪い手本です。ルカは、共同体の中にいたあまり高潔でない人たちに関するこの物語を、正直に告白しています。

十戒において（出20:1～17）、むさぼりに関する最後の掟は、ほかの戒めと似ていません。ほかの掟は、人間に対する神の御心に、目に見える形で背く行為について述べていますが、最後の掟は心の中に隠れていることに関するものです。むさぼりの罪は行為ではありません。むしろ、思考の過程です。貪欲と、その同類である身勝手さは、目に見える罪ではなく、罪深い人間性の一つの状態です。それは、ここでアナニアとサフィラに関して見られたことのように、身勝手な行動としてあらわれたときにのみ、目に見えます。ある意味で、最後の掟は、ほかの九つの掟によって非難されている行為にあらわれた悪の根を明らかにしているのです。アナニアとサフィラの貪欲が彼ら自身をサタンの影響にさらし、その影響がきっかけとなって彼らは神にうそをつきました。それは、ユダの貪欲が彼にさせたこととよく似ています。

◆ どうやって自分の生活の中から貪欲を抜き去ることができますか。自分の持ち物を感謝し、神をほめたたえることは、なぜこの悪に対する防御手段なのか。

自分の財産を分かち合うことは、しばしば初代教会における一致の具体的なあらわれでした。使徒言行録の最初のほうの章に描かれている気前の良さは、のちにパウロが、エルサレムの貧しい人たちのために献金するよう、マケドニア州やアカイア州に設立した教会に求めた際にも続いています（使徒 11:27～30、ガラ 2:10、ロマ 15:26、Iコリ 16:1～4 参照）。この賜物は、おもに異邦人信者から成る諸教会が、ユダヤの伝統を持つエルサレムの兄弟姉妹を思いやり、愛していることの具体的なあらわれになります。文化的、民族的違いにもかかわらず、彼らはキリストにある一つの体を形成し、同じ福音をともに大切にしています。困窮している人たちとのこのような分かち合いは、すでに教会内に存在していた一致を明らかにするだけでなく、その一致を強めました。

IIコリント 9:8～15 を読んでください。初代教会における一致の体験は、今日どのようなことがなされるのかを私たちに示しています。しかし一致は、すべての教会員の意図的な献身がなければ、生じませんでした。初期の共同体の指導者たちは、キリストにおける一致を育むことを彼らの伝道の働きとみなしていました。夫婦間、親子間の愛情が意図的に日々育まれなければならない献身であるように、信者の間における一致も同様です。私たちがキリストにあって持っている一致は、さまざまな形で促進されますし、目に見えるようになります。

初代教会におけるこの一致を育んだ明らかな要素は、祈り、礼拝、交わり、共通の目標、そして御言葉の学びでした。彼らは福音をあらゆる国民に宣べ伝える使命を理解するとともに、互いを愛し、気遣う義務も自覚していました。彼らの一致は、地元の交わりの中でのその気前の良さ^{ひら}と相互支援の中にあられるとともに、さらに広く見れば、長い距離で隔たっていたにもかかわらず、教会共同体同士の間であられました。

「彼らの物惜しみしない心は、彼らが神の恵みをむだに受けなかったことをあかししている。聖霊のきよめによる以外に、いったい何が、このような寛い心を生じさせることができようか。信者と未信者の目の前において、これは恵みの奇跡であった」（『希望への光』1486 ページ、『患難から栄光へ』下巻 25 ページ）。

◆ あなたやあなたの教会は、他者への気前の良さの恩恵をいかに体験してきましたか。言い換えれば、ほかの人に与える者には、どのような祝福がもたらされますか。

参考資料として、『患難から栄光へ』上巻第4章を読んでください。

「信者たちのこのような寛容さは、聖霊が注がれた結果であった。福音を受け入れた人々はみな、『心をついにし、思いをついにし』た。彼らの心はただ1つの共通な関心事に支配されていた。それは彼らに委託された伝道事業を成功させることであった。彼らの生活に、貪欲がはいり込む余地はなかった。兄弟たちへの愛や自分たちが引き受けた働きに対する愛は、金銭や所有物に対する愛よりも強かった。彼らは地上の富よりも人の魂を高く評価していることを、実際の働きで証拠だてた。

神のみ霊が生活を支配する時には、常にこのようなことが起こるのである。心がキリストの愛で満たされている人々は、ご自身の貧しさによってわれわれが富むものとなるように、われわれのために貧しくなられたキリストの模範に従う。金銭、時間、感化力など、神のみ手からさずけられた賜物すべてを、彼らはただ福音のわざを進展させる手段として重んじるのである。初代教会ではそうであった。そして、今日も、教会の中で、教会員たちが聖霊の力に導かれて、世俗的なことがらへの愛着を捨て、自分たちの同胞に福音を伝えるために、よろこんで犠牲をはらうことが見られるならば、宣べ伝えられる真理は、聞くものの心を力強く動かすであろう」（『希望への光』1382、1383 ページ、『患難から栄光へ』上巻70、71 ページ）。

話し合いのための質問

- ❶ 初期の新約聖書時代の教会が、エルサレムの貧しい人々を助けるために惜しみなくささげたという手本は、いかに私たちが今日なすべき手本でしょうか。ほかの社会的問題はどうでしょうか。地域教会は、貧困を軽減し、ほかの基本的必要を満たすために、近隣社会といかに関わることができますか。
- ❷ アナニアとサフィラの悲しい物語から、私たちはどんな教訓を得ることができますか。2人の死に関して、教会は「非常に恐れた」と使徒言行録5:5、11にあります。その言葉の持つ重要性は何ですか。

まとめ

初代教会は急速な成長を遂げました。なぜならイエスの弟子たちが、約束された聖霊の注ぎのために、意識的に準備をしたからです。彼らの交わりと共通の信仰は、彼らを五旬祭に備えさせるために聖霊がお用いになった手段でした。五旬祭ののちも、聖霊はこの新しい共同体を変え続けられました。そのことは、お互いに対する彼らの気前の良さや、教会の急成長の中にあらわれているとおりです。